

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
4. 聖書から経済・政治・社会
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1: ウェーバー・テーゼをめぐって
 - 5-2: 近代経済学と神学——アダム・スミス
 - 5-3: キリスト教・資本主義・社会主義 1/6
6. キリスト教と政治理論
 - 6-1: 現代思想のパウロ論 1/20
 - 6-2: イデオロギーとユートピア 1
 - 6-3: イデオロギーとユートピア 2

<前回> ウェーバー・テーゼをめぐって**(1) ウェーバー・テーゼの背景とアウトライン**

1. 近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤
 - 宗教改革の精神（万人司祭） → 神の前における
 - 平等自立した個人と自由・平等（理念）
 - 西欧的な政治・経済・知のシステムとプロテスタンティズムの関係
 - 近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）
 - 近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）
 - 近代科学（マートン・テーゼ）
2. 宗教改革と近代との逆説的關係：ウェーバー・テーゼの場合
 - 近代キリスト教における新しい職業倫理・労働観と資本主義の精神
 - 両者の意図せざる逆説的歴史的な関係
- (2) ウェーバー・テーゼにおける二つのレベルの交差**
7. Max Weber, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, 1904/05 (J.C.B.Mohr, 1934)
8. 議論の二つのレベルの交差
 - 論理的／心理的歴史的、必然的／偶然的
 - キリスト教的近代と近代的諸システム（民主主義、市場経済、近代科学）
9. ウェーバー・テーゼ：4つのステップから構成される論理構造
 - Step 1. プロテスタントの職業観
 - Step 2. カルヴィニズムの禁欲的エートス
 - Step 3. 資本主義の精神
 - Step 4. 資本主義の経済システム

10. テーゼの仮説性：

(3) ウェーバー・テーゼと聖書

15. ルター訳聖書の問題

16. Berufに集約された二つの観念

18. ルターの意義

19. ルターの限界

「高利貸と利子取得一般を非難したルターの幾多の言葉のうちには、資本主義的営利の本質に対する彼の見方が後期スコラ学派の比しても(資本主義の立場からみて)はなほだ「立ち遅れて」(rückständige)いたことが、明白にあらわれている」(118)

「宗教改革そのものの影響はさしあたり次のような点にすぎなかった。すなわち、カトリック教徒の見解と反対に、世俗的な職業労働に対する道徳的重視や宗教的報賞がいちじるしく高められたということである」(119)

「各人はひとたび神より与えられた職業と身分のうちに原則として止まるべきであり(der einzelne soll grundsätzlich in dem Beruf und Stand bleiben, in den ihn Gott einmal gestellt hat, S.76)、各人の地上における努力はこの与えられた生活上の地位の枠を越えてはならないのである」、「摂理の信仰に基づくものとなり、神への無条件的服従と所属への無条件的適応とを同一視するに至った(Vorsehungsglaubens, der den bedingungslosen Gehorsam gegen Gott mit der bedingungslosen Fügung in die gegebene Lage identifiziert. S.77)。このようにルターは結局宗教的原理を職業労働との結合を根本的に新しい、或いは何らかの原理的な基礎の上のうちたてるには至らなかったのである」、「倫理の領域における新しい立場の展開を阻止したのであった」(124)

「ルターの場合、職業の観念は結局伝統主義を脱するに至らなかった(So blieb also bei Luther der Berufsbegriff traditionalistisch gebunden)」(127)

「ルターが禁欲的自己訓練の傾向を行為主義として危険視し、そうした自己訓練はルター派教会ではますます背景に退かねばならなかったからである」(128)

「宗教改革はルターの個人的な宗教的發展から切りはなして考えられず、また彼の人格から長きにわたって深い精神的な影響をうけたとはいえ、彼の事業はカルヴィニズムなしにはとうてい外的な永続性をかちうるには至りえなかったからである(wenn die Reformation ohne Luthers ganz persönliche religiöse Entwicklung nicht vorstellbar und geistig dauernd von seiner Persönlichkeit bestimmt worden ist, so wäre ohne den Calvinismus doch sein Werk nicht von äußerer Dauer gewesen. S.79f.)」(131)

5. キリスト教と経済学説

5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス

<アダム・スミス問題>

1. 「スミスの「近代経済人」の性格が議論される時、道徳意識の次元は問われることなく、自己の幸福のみを追求することを促す、「利己心」(「自愛」、「自己利害」)の動機によって特徴づけられるのが普通である。一般には、スミスは人間の利己的動機に即して経済的世界を想定していること、この人間の根深い利己的動機ゆえに、市場経済において首尾一貫した経済的合理的な行動が促され、それが経済発展を支える主体的な動因となる

S. Ashina

と、理解されている。ここに、初期のスミスを代表する『道徳感情の理論』にみられる道徳意識に関する議論と、『国富論』における「利己心」を前提とする経済学とは、どのような関係に立つのかという疑問が生まれ、初期のスミスと後期のスミスの統一的理解にかかわるあの「アダム・スミス問題」が発生することになる」（梅津、206）

2. 「彼はこの経済理論体系から、道徳的考察を除くことにした。彼は物質的な生産の分析とその発展の諸法則を研究するような、一つの体系的科学の構築を試みようとしたのであるが、それが彼の哲学上の立場の大幅な変更を意味するのかどうかは、一九世紀になって思想史の分野で大いに議論された「アダム・スミス問題」という謎となった」（伊藤、50）

（1）近代社会科学とキリスト教

3. 「キリスト教に関する知識がヨーロッパ近代思想の理解に不可欠なことは、改めて指摘するまでもない周知の事柄である。しかし、近代思想とキリスト教との具体的関係については、キリスト教の教義や神学思想の理解が容易でなく、下手に手を出すと泥沼化するおそれも多いことから、一般には自明の理として前提するにとどめ、本格的接近は避けて通るのが、これまでの内外の、とりわけ日本の研究の大勢であったといえるであろう。日本の人文・社会科学の深化を妨げていた壁の一つがそこにあったことは明かである」（田中、3）

「宗教・神学思想を踏み台にして登場してきた近代思想の生誕の秘密と動態を解き明かす点にある。ヨーロッパ近代思想は、一般には、キリスト教を理神論的に骨抜きにし、啓示神学を自然宗教化する過程で形成されてきたと解されるが、その実態はキリスト教の理神論化という言葉で括れるほど単純ではない。むしろ、正統キリスト教の啓示宗教的神学思想がバネになって、逆に徹底して近代的な思想の形成・展開が可能になるという側面があった次第が大きく注目される要がある」（5）

4. 「カルヴァン主義的神観念」、「神の予定は恣意的であるため、人間には理解しえなくても、神が第一起動因として予定した世界の法則は原因⇒結果の自然法則の設定者としての科学的な神観念に従って、因果論的に理解されうるからである。予定説の論理に象徴されるカルヴァン主義的神観念と自然宗教的な第一原因としての神観念とが結びつく契機はそこにあるが」（8）

「ストアやアルミニウス主義者らと異なるスコットランド啓蒙思想の特色は、自然法の神学的基礎付けと神学（啓示）の自然主義化という二つの主題が、一体的に行われていた点にある」（35-36）

5. 「アダム・スミスの『道徳感情論』は、このように、ホブス・フーフェンドルフ・ロックに代表される一七世紀の自然法的道徳哲学の分離・分界論の限界を克服した神学前提の道徳哲学の完成に導くことを通して、道徳主体相互間の自由な競争関係の上に成立する社会科学形成への道と拓いた点に、その最大の意義と特色をもつものであった」（45）

（2）アダム・スミスの自然神学

6. 「正義＝法の原理論としての『感情論』の倫理学は」「グラスゴウ大学におけるスミスの「道徳哲学」講義の第一部門をなしていた「自然神学」講義を前提とするものとして、その基礎の上に展開されたものであった」、「神の存在と属性の証明と、宗教の根拠をな

している人間精神の諸原理の考察」を主題」(159)

「法学の神学的基礎を明らかにすること」、「スミスもハチスンと同様に、情念の運動を人間の自然の構造に基づくものと考えていたのである」(160)、「自然の構造」分析が同感感情の心理分析に基づいて行われている点」「同感原理に基づく人間の自然の構造分析」、「スミスは、「富と徳性」の合致の可能性を「自然の狡知」(工夫・計略)という神学思想によって説明していた」(161)

7. 「偶然の効用」「人間の弱さと愚行の中に神の英知をみる」(162)

「ケイムズ同様」「神の永遠の正義」の支配を承認しながら、それがはっきり認知しえないのは、分かってしまうと人間は何もしなくなってしまうので、人間が身近な「出来事に精を出す」ように仕向けるため、曖昧に隠されているのである、「人間が自然の必然法則の支配下にありながら、それが隠されていて見えないため、自然にだまされて」、「富と地位の快樂」を追求する」「ことが必然法則実現につながると考えていた」(164)

8. 「スミスの神観念」、「神の英知と善性」、「神の「普遍的仁愛」」「を肯定」、「ストアのそれに近いこと」、「スミスはこうした仁愛的な性格とカルヴァンのなまじりさを合わせもつ「神の法」・「神の正義」の支配を、『感情論』全体の論理の核にしている」(165)、「『感情論』の直接の主題は」「こうした倫理と法の根本大前提としての神法の支配ないし神の正義の論理を前提化することによって、「神の正義」論とは異なる地上の正義論を確立する点にあった」、「スミスは、「自然の不可変の諸法」(自然の必然法則)とその創造者としての「神の正義」を認めながらも、それが「はっきり認知」されえぬため、自らの自然の感情のままに」「人間が従うべき地上の倫理の確立を『感情論』の直接の主題とした」(166)、「神の摂理の有効化因として、自らの自然の感情のままに「自然の性向」に従って行動する人間が、立場を交換して「観察者」視点に立つところに成立するこの世の正義の確立を『感情論』の直接の主題とした」(167)、「自然の構造の狡知性」(168)

9. 「人間の「道德感情(moral sentiments)」そのものをデザイン(目的因)の有効化因(作用因)としてとらえている点」(168)、「自然的感情」「としてわれわれの道德能力の活動を一人の感情的交流・交通原理としての同感に求め、その上に全体系を展開した」、「コミュニケーション原理としての「同感」概念の成立」、「他人との感情的交流なしには生きられない人間の同感感情の自然の働きの結果」(169)

10. 「経験原理に立脚する倫理学」、「想像的同感」、「想像上の立場の交換」の論理、「観察者」視点を意識的に対自化した」(171)、「内なる人」「胸中の法廷」「良心」(172)

(3) 経済学とキリスト教思想

11. 「『道德感情論』の「みえない手」は」「自然の必然法則、ないしその起動因としての目的因を意味するものであった。スミスは、人間にはそれがみえず、みえると行動しなくなるため、必然法則がみえないままに、自由に手段の適合性を追求することが、結果的には目的期成因(efficient causes)として必然法則実現機能を果たすことになる、自由(作用)⇒必然(目的)のプロセスを「みえない手に導かれて」という言葉で表現したのである」、「みえない手の働きの表現としての作用因(人間)の活動の経験的観察によるみえない手＝自然の「隠された統合原因」の発見を主題化する」(263)

S. Ashina

12. 「「摂理楽観主義」は、こうした神学的必然論とそれを前提とした上述の論理に立脚するものであった」、「『感情論』初版が、厳密な意味では徳性論ではなく、ありのままの人間の利己心とパーシャリティを前提として上で、ありのままの自然の欲求に生きる人間相互間の社会関係の規制原理としての第三者の立場の論理と公平な観察者の同感を唯一の原理とするミニマリスト・モラルの確立を主題とした」（266）

13. 「『国富論』も、『感情論』と同じ作用⇒目的の論理に立脚するものとして、経済過程における作用⇒目的の自然法の解明を通して、その実現阻害条件を排除することを基本主題とするものであった。スミスが、『国富論』で、各人の自由な利己心追求活動がその意図しない帰結として社会全体の富の極大化とその適正配分につながる経済世界の自然法則を明らかにする一方、そうした自由（作用）⇒必然（目的）の自然法則の貫徹・実現を妨げる重商主義政策や、それと結びついた特権や独占を批判した根拠はそこにある」（266）
「みえない手の摂理の現実化機構としての市場の意義」（268）、「『国富論』の「自然的自由の体系」の基本旋律は、このように作用因の自由な活動のみが神の意図した全人類の幸福という目的を実現しうるとの偶然・自由＝作用⇒目的の自然法則の妥当・貫徹に対する信頼」（269）

14. 「スミスは、『感情論』から『法学講義』をへて、『国富論』に至る過程で、経済社会における作用⇒目的のデザインを論証する経済理論体系の成熟と、それに対する現実認識の進展に伴って、『感情論』の論理の根幹をなしていた作用（自由）⇒目的（必然）の論理の根幹をなす目的因仮説をひっこめ、作用因としての人間の構成する経済過程のそれ自体としての経験的分析・叙述に専念することになったのである。みえない手が、『国富論』では神秘性を感じさせず、文字通り比喩的表現に転化している理由はそこにある」、「『国富論』体系の完成とともに、建物の足場ないし枠組をなしていた神学思想（目的因仮説）は全面的に取り払われることになったのである」（267）

<参考文献>

1. 梅津順一『近代経済人の宗教的起源——M. ヴェーバー、R. バクスター、A. スミス』みすず書房。
2. 田中正司『アダム・スミスの自然神学——啓蒙の社会科学の形成母体』御茶の水書房。
3. 伊藤邦武『経済学の哲学』中公新書。
4. Paul Oslington (ed.), *Adam Smith as Theologians*, Routledge, 2011.
<http://logosoffice.blog90.fc2.com/blog-category-2.html>